私の履歴書

岸 恵子 ㉔

別居

カトリック教徒が多いフランスでの離婚は長びく。離婚成立の前に「別居」という制度があり、私はそれを取り入れた。祖国を離れ、未知の街パリへ着いた日から18年たった1975年5月1日。スズラン祭りの日差しが凱旋門を紅に染めた時、我が家と思って住んだ夫の家を去った。

娘、愛犬ユリシーズ、そして嫁入り道具の三面鏡を乗せた自動車のバックミラーに滂沱として涙を流す夫の姿が揺れながら遠のいていった。

夫から独立 仕事にまい進

大作断った無念 扶養の義務辞退

「パパ……！」と娘がつぶやいた。凱旋門に近いパリ右岸にあった高級住宅地から、娘の仲良しが住む左岸の学生街に引っ越した。仮住まいはまだ建築中で電気はあったがガスが引けてなかった。

5月1日はメーデー。開いている店は花屋と酒屋と菓子屋だけ。自動車に積めるだけ積んだ本を重ねてテーブルを作り、「寿」と染め抜かれた赤いちりめんの風呂敷を掛けた。それは横浜の実家からフランスへ嫁いだ時、母が近所に配った引き出物だった。

職人さんが忘れたらしいトンカチが転がっていた。私はそのトンカチで即席テーブルを叩きながら、調子っぱずれな声でよさこい節を歌った。私を見かねたのか、娘と仲良しのナタリーがシャンパンを買ってきて乾杯してくれた。

「ママンの新しい人生のために」。紙コップに注いだシャンパンをチラッとなめて顔をしかめる11歳の2人の少女に私もシャンパンを掲げた。

「18年前の今日、私は日本という祖国から独立したの。今日はかけがえのない夫からの独立なの」

私はポロポロと涙を流してキラキラと笑った。ぬれた瞳の娘が背中に隠していたらしいスズランの花束を私に放り投げるようにくれた。そこには娘の万感こもる思いがあったのだろう。翌日、夫が当座必要なものを運んでくれた。その中に、義母がデザインした24人分の素晴らしい銀食器類があった。

「これは母が僕と惠子の結婚祝いに贈ってくれたもの。他の誰にも使われたくない」

それが聞こえたらしい娘がつと立ってドアの外へ消えた。幼い娘がどれほど傷ついたことか。87歳になった私が後悔しても詮無いこと。

生活費や教育費を払うのは父親としての義務であり、権利でもあると言ってくれた夫の誠意もかたくなに断り、私は仕事に打ち込む生活を選んだ。あの頃の私の一途さには異常なものがあった。

今にして思う。

おぼろ月夜の麦畑で泣きぬれた10歳の娘を抱き取った時、なぜ唐突な離婚を思い立ったのか……。私なりに結婚生活への疑念があった。

自分を殺して幾つかの映画の大作を断った無念さも鬱積していた。「雪国」の撮影中にデヴィッド・リーン監督が世界的ヒットになる「戦場にかける橋」で私の役を書き、相手役ウィリアム・ホールデンさんもわざわざ日本まで勧誘に来てくれたのに、私は「雪国」で映画という卵を割っていたのだった。リーン監督は無念がってくれたが、私のための「役」を削除した。

出演できなかった数々の映画。それらへの慚愧の思いが私を暴挙に走らせたのだ。

私は長年愛しんだ「家庭」という卵も割ってしまった。

この時の日本の法律は私が父親でないので娘に日本国籍をくれなかった。以降、娘が結婚するまで私は女盛りを働きながらパリで過ごすことになった。

（女優）

離婚を決意した日に撮ったスナップ写真

掲載日 2020年5月25日 日本経済新聞 朝刊 36ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。